
【急募】あたしの名前！

伊達巻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【急募】あたしの名前！

【Nコード】

N9180S

【作者名】

伊達巻

【あらすじ】

Twitterだけが社会との接点な、そんな引きこもりの二ト生活。

どうしようもない、どうしようもないんだ、諦めきつた言葉しか青年の口から出てこない。

名無しの女の子に名前をあげたとき、物語はTwitterから外へと動き出す！

ライトノベル作法研究所にも同名義で投稿しました。

PROLOGUE - 1

UNOoEN 【急募】あたしの名前！

gm|kuz @UNOoEN うこ！

UNOoEN @gm|kuz ……ピキッ。猫のうんこ踏んで

死ね！

それが、僕と彼女のファーストコンタクトだった。

第一印象は最悪だ。

僕としてはTwitterの公共性を考慮して伏せ字にしたっていうのに、向こうはダイレクトにうんこ発言ですよ。そりゃないよ、と半年ほど床屋に行つてない無造作ヘアをワイルドに掻きながら、僕は思わずディスプレイに向かって「やれやれ」と呟いてしまった。いま、ちよつとだけ自分にさば読んだ。

本当は半年どころか一年以上、食糧調達以外ろくすっぽ家から出てない完成された出不精の僕。鏡なんか見たら「やれやれ」じゃ済まないコミュニケーション障害二十歳児が映つてしまい、冗談抜きで自分自身に吐き気を催してしまう。

死のう。

そう思ったことも一度や二度ではない。いちいち交通量調査よろしく数えてなんかないからわからないけど。

困ったことに、僕はどうしようもない人間だという自覚はある。

TwitterのIDだって、ゴミ屑を自称してしまう卑屈な男なんだ。

対する“UNOoEN”はいい加減使い古された感があるパロディが元だろう。アガサ・クリステイの小説はミステリというよりヒステリな作風が多いと思うけど、そんなことを言ったら黒ずくめの男たちに社会的に抹殺されてしまうだろうから、もちろん言わない。とにかく、今は目前の“UNOoEN”について考えてみよう。

アイコンはデフォルトの小鳥のまま。ちなみに僕のアイコンは、くしゃくしゃに丸めたティッシュだったりする。「人間は考えるティッシュである」を定期ポストしてるくらい、ニヒルなティッシュだ。

僕はもちろん毎日ティッシュを浪費する不健全な男子だけど、“UNOoEN”はどうだろう。

あたし、という一人称を人見知りがなくなった三歳児のように無垢な心で信じれば、“UNOoEN”は女性である可能性が高い。私、ならまだしも、あたし、というところがミソだ。男性なら書き言葉でも「あたし」を使うことは少ないだろう。

ところがどっこい、社会の荒波に飲まれたことはないくせにネットの荒波には揉まれ慣れてる二十歳児の僕は、変な期待を抱かないのであった。

たとえ可愛らしいなあ、胸きゅんだなあ、という発言があつたとしても、今日もおっさん頑張ってるな、とクールに流すスキルが身に付いてるのだ。

つい最近、ちよくちよくTwitter上で絡むようになってきてどういう人か気になるなあ、と思っていたアカウントがbotだったときの衝撃。僕に一生消えない爪痕を深々と残した『bot美人局事件（勝手に命名）』も考慮しなければならぬ。

そんな僕がTwitterを始めて、はや三ヶ月。きっかけは、こんなネット記事を見つけたからだ。

『Twitterをやってるのはリーダー型の男性が多い！』

マジで！？

なら、僕もTwitterやったらリーダー型の男性になれるのか！？

鶏がさきか、卵がさきか。泣くから悲しいのか、悲しいから泣くのか。Twitterをやってる男性がリーダー型なのか、Twitter

terをやつてればリーダー型の男性になれるのか。

三日間寝ずにネットゲでレアアイテムを求め続けて朦朧な状態であったことを踏まえても「アホかと！ バカかと！」と自分でも思う非論理思考でTwitterを始めたのだ。

そして、はた、と氣づく。

「いまどうしてる？ だ、と……。んなもん、どうせ僕は何もしてねえーよぉーっ！」

記念すべき最初のつぶやきで「自宅なう」と平日の真つ昼間にしてしまったのも比較的新しい黒歴史の一つとして腐った生ゴミのよな瘴気を発しながら自己主張してる。

そして、はた、と氣づく。

「こいつらは……僕は違う……は、働いてる！ 学校行ってる！
なんだよぉー！」

家から何食わぬ顔して出られるだけでリア充認定ができる僕としては、衝撃だった。

匿名掲示板だつてもちろんそうなんだろうけど、中途半端にオーブンに個人が個人として特定されるTwitter文化で「カラオケなう。ちょー楽しい」「いま彼氏と二人で観覧車に乗ってまーす」「なんか見てみるよ写真付きで、こちら「自宅なう」がデフォだよ、たまつたもんじゃない。

一度「自殺したいなう」なんてつぶやいたら、「とりあえず、落ち着こう」と存外に真面目な雰囲気で諭されたときはかなりこたえた。それが如何にも自己啓発セミナーのアカウントで不自然につぶやきの数が多くて半自動で「自殺」というフレーズに反応してるだけのスパムだとわかったときは余計にさ。

だけど、暇さだけが取り柄の僕には、Twitterはうつつ

けの暇潰しになった。

フローされたら光の速さでフローし返す、という二ト固有スキルのおかげか、薄っぺらながらも幅広い繋がりがある。

別にフローワーが増えたところで、気負うこともない。

どうせ、僕はどうしようもない人間だから。

こなすべきノルマもないし、ネットゲのように相手と時間を合わせる必要もないし、ぼちぼちと自分の何気ない一言に反応してもらえたら、そこそこ嬉しかったりする。それだけで、充分だった。

リーダー型の男性？ はあ、まあ、そういう人もいるでしょうね、という感じで当初の目的は三日も経たずにどうでもよくなってしまうけど。

もちろんオフ会などというアクティブな話をしてるのを横目で見ただけなのは、なんとなく自分が惨めになったりするけど、もともと自信なんてものは公衆便所でお尻に正の字を書かれる勢いで喪失してきた。

PROLOGUE - 2

やりたいことがある、とうそぶいて大学を中退し一年あまり。

夢といえるものが、ないこともない。

一応、小説家やシナリオライターになりたいと思えばつづ書いてるけど、書いてる時間の倍以上はネトゲをやったり無意味にネットニュースのリンクを辿るだけの日々。

何かを書きたいという欲求も、嘘ではない。

僕は、引きこもりなオタクの例に漏れず、ゲームや小説が好きだ。フィクションの世界でなら僕は常に主人公になれる。無条件に女の子にモテることもできるし、悲しい宿命を背負った勇者として世界を救うこともできる。

文字通り陽の光の当たらない生活をしてる僕なんかには、たまに眩しすぎることもあるけど、やっぱり面白い話に触れると感動するし、いつしか自分でも作ってみたと思うようになった。

不特定多数の人を感動させるものを、自分で作れてお金が貰えたら、少しは生き甲斐が出るかもしれないと夢見たりする。まったくもって将来設計のなつてない未来予想図だけど、それ以外に道はないと思うほど僕は他に取り柄がなかった。

もちろん文才がある方かと聞かれたら、もってまわった独特な言い回しがたまに褒めて貰える程度で、自分より上手い人間なんて五万という。

本当、どうしようもない。

小説家になりたい、シナリオライターになりたい。

たまに、本当に自分がプロの物書きになりたいのか、わからなくなる、不安になる。

やりたいことではなく、やりたくないことから逃げるための口実なんだ、きっと。

自分でも気づいてるから、余計に悪い。

親からの仕送りは続いてるけど、あいにく固定電話という鬼畜なアイテムは持ってないから半音信不通状態。あれは、危険だ。鳴っただけで、僕の寿命を縮ませてくる。死神の足音の方が遥かにマシだと思う。

携帯の着信は、もちろんマナー設定。常に居留守状態を決め込んでる、携帯なのに。どうにかこうにか、たまのメールのやり取りで故郷の両親に生存報告してるけど、これ以上不審に思われたらアパートまでやって来るかもしれない。

そしたら、ジ・エンドだ。

恰好つけて公務員試験の勉強中、と愚にも付かない嘘をついてたことも、バレてしまう。

それでも、僕のことを否定しないであろうどこまでも優しい両親……心底死にたくなる。

既に“UNO O E N”のことは頭になかった。自分のことで手一杯で、苦しくて、辛くて。周りなんて見る余裕がなくなる瞬間が、僕には唐突に訪れる。

弱いから、みじめだから、どうしようもない。

「本当……どうしようもないよな、僕」
思わず、つぶやく。

散らかり放題のかび臭い部屋に、僕のつぶやきは吸い込まれていった。

虚しい。

誰に向けるわけでもないつぶやきというのは、結局は自分に返ってくる。

どうしようもない。

本当に。

どうしようもない、僕は、本当に。

繰り返す。

言葉にすることで慰めを求めているのがわかって、吐き気がする。今が朝なのか夜なのかすらあやふやだ。

生きてるか死んでるかだつてあやふやだ。
なら、いつそ。

「もつ……死のうかな。なーんて、ね……」

僕より優秀でみんなに惜しまれる人はあっさり死んで、僕みたいな屑は長生きしてしまうのかもしれない。虫の意外な生命力を彷彿とさせる。そんなこと言ったら、懸命に生きてる虫に失礼かもしれないけど。

gm | kuz 本当……どうしようもないよな、僕。誰かさ、これから僕を救ってくれない？

gm | kuz 取り柄なんてないし実績なんて皆無だし要領悪いしないない尽くしただけ。

gm | kuz 【急募】僕みたいなゴミ屑を、かび臭いゴミ箱から救い出してくれる人。

みじめだった。

けど、この鬱屈したもやもやを自分の中だけに留めきれないのも事実だった。

早速さっきのツイートに対するリアクションが返ってくる。反応がもらえるようにつぶやいたし、僕は幸いフォロワーが多かったのだ、これは期待通りだ。

プライドを切り売りして、同情を買った。

まったく、自分の卑しさに反吐が出る。

自分宛のつぶやきがディスプレイに流れるのを、暗くなってきた部屋でぼんやり眺める。

ネットのように顔が見えないと、人は優しくなるか厳しくなるか、どちらか極端な立場をとるらしい。匿名性の高い掲示板だと攻撃的になりやすく、匿名性が下がるに従い擁護的な意見が反比例して増える。Twitterはオープンな場でなおかつ匿名性が保ちにくいので、どうしようもない僕にも優しい言葉を投げかけてくれる。

生きる、いや、生きてますけど、頑張れ、それ、鬱な人に言っちゃいけないって知らないんですか、とりあえず落ち着こう、また、怪しげなセミナーのお誘いですか。エトセトラ。

液晶に映る生温い人の優しさに触れながら、僕はどうにか、ぎりぎりの崖っぷちに生きていた。底辺にもほどがあるし、未来なんて真っ暗だけど、たぶんそれでも……。

ふと、“UNoon”のツイートが目にとまった。

UNoon @gm_kuz ……もう、わかったから、早く！
【急募】あたしの名前！

こいつはどんだけ、自分の名前を決めてほしいんだよ。俺宛ての【急募】ってなんだよ、急ぐようなことかよ。

そういつたツツコミを入れてやろうかと思った、けど、なぜだろう。僕はありふれた励ましの言葉より「もう、わかったから」という一言に……救われた。

逃げ場所を、与えてもらった気がした。

気のせいかもしれない、気のせいだろう。

わかってもらえるものが、わかってもらってたまるか、僕の苦しみはきつと僕だけのもので共有なんてできないもので、閉じてて湿っぽくて氷点下でもぐつつ沸騰してる気色悪い灰色のスープで……。

それでも、“UNoon”は「もう、わかったから」と言ってくれるのだろうか？

もしかしたら、誰でも良かったのかもしれない。

誰かに、励まされるのでも叱られるのではなく「もう、わかったから」という言葉をずっと待っていたんだ。ただ、認めてもらいたかった。受け入れてもらいたかった。

僕が欲しかったのは、大物俳優に向けられる煌びやかなスポットライトではなく、トップアスリートに用意される誇り高い表彰台で

もなく、ただの……逃げ場所だった。それが「もう、わかったから」に込められてるように感じた。

まだ名前も知らない“UNo o EN”というアカウント。
名前。

そう、名前。

どうして僕なのかわからないけど“UNo o EN”は名前を欲しがってる。偶然だろうが、僕は“UNo o EN”にささやかな「救い」をもらった。なら、せめて名前くらいあげてやらないとフェアじゃない。

あたしという一人称から、ここは素直に“UNo o EN”を女性と仮定しよう。もしこの前提に文句を言われても、僕には非がないはずだ。なら、なるべく可愛い名前がいいだろう。

可愛らしくて、未来に希望がもてるような、そんな名前がいい。

……よし、思いついた。

gm | k u z @UNo o EN そんなにほしいんなら、僕が名前くれてやろう。

UNo o EN @gm | k u z え？ おお！？ リアクションがあつた！ ありがとう！ でどんな？

gm | k u z @UNo o EN アイミ、なんてどう？ 愛する未来^{アイミ}って書いて、愛未。

UNo o EN @gm | k u z ちょっとキザなネーミングだしw けど、うん、あたしはアイミ……。

UNo o EN みなさま、あらためましてはじめまして、あたしはアイミです！

その日のアイミのツイートは、それが最後だった。

今さら気になってアイミのプロフィールページに飛び、僕は少し驚いてしまった。

フォロワー数1フォロワー数1つばやきも僕とのやり取りだけ。

つまり、本当に始めて間もなかったんだ。

自己紹介も「ちよつと痛い発言が多いかもしれない、ただの妄想好きなです」とあるだけで、詳しくは書いてない。現在地は、鳥かごの中。もちろん、この手の冗談は珍しくないし、そういう僕だつてゴミ箱の中と書いてるのでどっこいだ。

そして、プロフィールの名前は……。

既に、アイミに変わっていた。

それから一週間、アイミは何もつぶやかなかった。

ACT 1 - 1

gm | k u z 本日も晴天なう。けれど僕の心は曇天なう。いつも恋人は心太なう。

gm | k u z 「うつ」を変換して最初に何が出るかによって、その人が鬱。

gm | k u z 【公園で黄昏れる親父ギャグ】カッター買ったらもう……死のうかな。

相変わらず、僕はどうしようもないことをつぶやいてた。

こんな僕でもフォローしてくれる酔狂な方が多いので、何気なく書き込んだつぶやきがふぁぼられたりリツイートされたりするのは、最初こそ申し訳ない気持ちになったけれど、次第に快感になってきた。

コミュニケーションが嫌いなのに、誰かとどこかで繋がってないと不安で仕方ない。

どうしようもなくあやふやな僕は、どうしようもなく矛盾していた。

へばり付くようにディスプレイの前から微動だにしない熟練された出不精の僕は、PCに根を張り巡らして『繋がりたい欲求』をネット経由で吸収していた。

ちなみに、葉緑体がないのか光合成はしない。

太陽の奴は、僕のみじめさをあざ笑うかのようにないつも笑ってやる。月だってニヤニヤ笑ってるけど、太陽は僕の嫌いな体育会系のようにガハハと笑うから嫌いだ。みんなも笑ってる。お日様も笑ってる。ルールルルル！

回転椅子でくるとダンスをする頭がお花畑な僕は、一週間ぶりのアカウントを見つけて自転を止めた。

U N o o E N U . N . オーエンはあたしなのだッ！

U N o o E N 嘘なのだッ！ あたしの名前は、ア、アイミ……

うは、やっぱハズッ！

U N o o E N てか、これ見てたら反応しろッ！ 名付け親で童

貞二ートのキモオタ野郎ッ！

g m | k u z @ U N o o E N 誰がキモオタだ！ せっかく名

付けたのに、とんだ親不孝者め！

U N o o E N @ g m | k u z 童貞二ートを否定しないところ

を見ると、どっちが親不孝者だッ！

g m | k u z @ U N o o E N o / r z

ま、負けた……。

それはそれは疾きこと風の如く、あっさりとカウンター発で首まで持ってかれた。

いやけど、アイミのその返しは辛いつて、僕に「こうかはばつぐんだ」ですよ。親不孝者だなんてわかってるし、童貞二ト否定できないし、どっちかというとキモオタも否定できるかどうかかわからないし。

このままだと精神的に完膚無きまでに陵辱されてしまうので、流れを変えなければ。

g m | k u z @ U N o o E N んなことより、名付けたのも束の間、全然つぶやかなかったじゃん。

U N o o E N @ g m | k u z もしかしてけど、アイミのこ
と、心配してくれたのかにや？

g m | k u z @ U N o o E N バカじゃねえの、そんなんじゃ
ねえよ、バカじゃねえの。

U N o o E N @ g m | k u z ツンデレ？ ツンデラー？ ツ
ンデレスト？

g m | k u z @ U N o o E N ワタシ・エイゴ・ワカリマセン・

ココ・ドコデスカ？

U N o o E N @ g m | k u z 意味わかんないけど、人生に迷子ってことは伝わった！

心配してくれたのか、と問われて始めて、ああ、僕はアイミのことを心配してたんだなっていうことに気づかされて、どうにか誤魔化そうとしたのに、また些細なダメージを受けるなんて。

そうさ、どうせ僕は人生に迷子なちゃらんぼらんですよ。
なら、アイミはどうなんだろう。

一週間どうしてたのかについてはお茶を濁された感があるので、遠回しに聞くか。

g m | k u z @ U N o o E N そっちこそ、随分と暇そうじゃないか。学校とかないの？

U N o o E N @ g m | k u z うーん、朝と夜以外は、くずっちと同じくらい暇かな。

g m | k u z @ U N o o E N 朝と夜以外？ そんなことより、おい！ くずっち、て誰だよ！

U N o o E N @ g m | k u z え？ なに？ ゴミ屑って言われたいんだ（冷めた目

g m | k u z @ U N o o E N いや、まあ、くずっちでいいです……。

T w i t t e r は 誰 に メ ッ セ ー ジ を 飛 ば す か @ を 付 け て 表 示 し て るので、さん付けで呼んだり呼ばれたりする機会が少なかったから気にしてなかったけど、僕はIDがg m | k u z で名前もゴミ屑という卑屈全開のネーミングだった。

ゴミ屑のような人間といえども、ゴミ屑と呼ばれるよりかまだ愛嬌のある「くずっち」という呼び名の方がいいだろう。

あだ名なんて、あまりいい思い出がないけど。

そんなことはどうしようもなく些末な問題だ。

ネット上でゴミ屑だなんだと言われたところで、僕はさほどダメージを受けない。インターネットというワンクッションがあれば、僕は人と安心して繋がることができる。リアルだところはいかない。生々しいまでにむき出しの醜い世界が、僕を襲うから。

他人の空々しい視線、形だけは文句なしの偽善、鋭い悪意、言葉、ナイフのような。

もう、あんなのは、嫌だ。

UNo o EN @ g m | k u z ねえ、くずつち……。ネットつて、優しいと思わない？

思わず、息をのんだ。

ちように考えてることを見透かされたような気がしたけど、偶然だろう。アイミも、現実で何かしらの問題を抱えてるのかもしれない。僕と一緒に外の世界に恐れを抱き、安全な箱庭しか居場所がないのかもしれない。だからこそ、僕に「もう、わかったから」と逃げ場所を与えてくれたのか。なら、僕もアイミにとって逃げ場所になれてるのだろうか。

g m | k u z @ UNo o EN きつとき、現実が厳しすぎるだけなんだよ、それは。

UNo o EN @ g m | k u z だね……。あーあ、誰か私を救ってくれる王子さまいないかなー！

g m | k u z @ UNo o EN これみよがしだな！ やっぱ、アイミも引きこもりか！

UNo o EN @ g m | k u z ぷぷぷー、この人、自分が引きこもりって暗に認めてますよ。

g m | k u z @ UNo o EN は？ 全然ちげえーし。平日休みなだけだし。やり手の営業だし。

UNo oEN @gm|kuz 強がなくてイイじゃんツ！
あたしも似たようなものなのだッ！

まったく、引きこもりって威張るようなことかよ、と思いながらも、やはり僕は少しだけ肩の荷が下りたような気がした。

傷の舐め合いだという自覚はある。

Twitterというテーブル上に精神的内臓を無造作に広げだして、誰か僕と同じような疾患をもってませんか、もしくは治してくれる素敵なお医者さんはいませんか、と下心丸見えでつぶやいてるんだ。自虐的なつぶやきにTwitterを使ってるのは、そんな奴ばっかだ。もちろん僕も例外じゃない。本当に、どうしようもない。

アイミとの繋がりには、生温い馴れ合いだった。

手探りだけど、自分の暗部を仄めかしながら、お互いの内臓の感触にホツとしていた。

逃げ場所が居場所になってるんだろう、どうしようもないことに以来、僕とアイミはTwitterを通してちよくちよくやり取りをするようになった。

驚いたことに、アイミはTwitterを始めたのは最近だが、僕のつぶやきは以前から追ってたそうだ。別サイトで僕のつぶやきが引用されてたらしく、そこで興味をもったのだと微妙に恥ずかしながら言っていた。

こっちこそ、なんだか「ずっとまえから、好きでした」と言われてると錯覚して、むず痒いような、嬉しいような、悪くない気持ちになれた。

アイミは平日の昼頃から夕方までしかTwitterに顔を出さないで、僕が時間を意識して合わせるようにしていた。

アイミと過ごす時間は居心地が良い。

十年來の友人、なんてものはリアルの僕にはいないけど、まさにそんな感じにすぐに打ち解けることができた。

他のフオロワーともやり取りがあるものの、明らかに僕はアイミを特別視してる。それを恋愛感情と呼ぶには恥ずかしいし、そもそもアイミの性別諸々だってよくわかってない。

けれど、今の関係を大切にしたいと思うほど、僕がアイミに惹かれていたのも事実だ。

ふと、アイミが珍しく僕に@を付けないでつぶやき始めた。

U N o o E N 土曜日なんて、日曜日なんて、来なければいいのに。

U N o o E N 誕生日なんて、絶対に、来なければいい、てか、来ないでよ。

U N o o E N そうだ、朝も夜も来なければいい、そうしたら、あたしはアイミでいられる。

g m | k u z @ U N o o E N ん？ 急にどうした？ 志半ばで死んだ詩人でも憑依したのか？

U N o o E N あたしはお人形じゃないし、もう、しっかりと、名前だつて、あるんだ。

U N o o E N @ g m | k u z くずっちが名前くれたとき、あたしは救われたんだよ。

g m | k u z @ U N o o E N なあ、どうして名前だつたんだ？ それじゃあ、まるで……。

U N o o E N @ g m | k u z ごめん、ヤツが帰ってきたからじゃあね。

「はあっ？」

思わず、声が漏れる。

なんなんだよ、あいつは！

勝手に中二病全開で二ヒリズムな詩をつぶやき始めて、名前をくれてやったことで救われただって？ まるで、今まで自分の名前がなかったみたいな言い方じゃないか！ それに、ヤツって誰だよ！

男か？ てか、アイミは本当に女の子なのか？ 僕はいつたい、何に苛ついてるんだ？

とりあえず落ち着け、僕。

ちよつとばかり、僕としては頭に血が上ってる。

すーはー。

深呼吸。

人混みを歩くと過呼吸になることが多い僕としては、かえって意識的に呼吸をすることで自分を落ち着かせることができる。大きく三回深呼吸した頃には、僕はもうすっかり落ち着いていた。アイミの情報を整理しよう。

1 . どうやら僕と同じで、引きこもりらしい。不登校の学生という可能性もある。

2 . 土曜日と日曜日、それに朝と夜が嫌いらしい。平日の昼間は平和なのだろうか。

3 . 誕生日も来てほしくないらしい。妙齢の女性でお肌の曲がり角だったりするのか。

4 . 名前にやたらと執着してる。お人形じゃないって、どういう意味だろう。

結局、わからないことだらけということが整理できた。

それに何が一番わからないかといえば、僕がどうしてこつも頭に來てるかということだ。自分のことですら、そうそう頭に来ない。馬鹿にされても、冷めた目で見られても、気持ち悪いと罵られても、僕はきつと怒らないし怒れない。石のように黙って人の顔色を気にしながら怯えて胃を痛めはするけど、全て自分がどうしようもない人間だからと結論する。

けど、アイミは。

わからない。

そう、わからないから、苛ついてるんだ。裏を返せば、僕はアイ

ミに興味をもってる。傷の舐め合いだろうが同属憐憫だろうが、僕に「もう、わかったから」と逃げ場所をくれたアイミのことを、もっと知りたい。

これは恋なのかもしれないと思ったけど、アイミが男という可能性もあるし……深くは考えたくなかった。女の子だとしても年齢や顔だって、正直重要なのである。自分のことは棚に上げてしまうけど、重要なのである。本当、どうしようもない。

ヤツが帰ってきたというつばやきを最後に、アイミは顔を出さなくなった。

ACT 1 - 2

僕はアイミを待ち続けた。

一日一日が、これほど長く感じたことはない。

つぶやくネタはなかったけど、僕がT w i t t e rをちゃんと見てることを伝えるために、毎日定期的につぶやき続けた。

g m | k u z 「ワールドカップの花言葉は？」 「もう一步前へ！」 (WCだけに)

g m | k u z ダーツバーの壁に礫られて小さな穴だらけにされるだけの、簡単なお仕事です。

g m | k u z 【BLの香りがする歴史上の事件】カノッサの屈辱。

虚しい気持ちにもなったけど、止めるわけにもいかなかった。

ここでアイミを取り逃したら、僕は今度こそ逃げ場所を失ってしまつのではないかと、わけもわからない焦燥感に駆られた。

薄暗い部屋で一人、僕は気がおかしくなりそうになりながら、アイミを待つ。

買い溜めしたカップラーメンは底を尽き丸一日なにも固形物を胃に入れてない。喉の渴きは水道水で癒してるけど、味気ないのが憎たらしい。そろそろ健康で文化的な最低限度の生活をしたい。そのためには家を出なければならぬ。

家を出る、か……。

自虐にしかないけど、引きこもりを甘く見ないでいただきたい。

怖いのだ。人が、外が、視線が、この世界が。

本当にどうしようもなくなったら外出はしないといけないけど、今回はアイミが現れるのをいち早く察知したい思惑もあり、引きこ

もりに妙な拍車がかかっていた。あまり寝てもない。朝晩の感覚はとうの昔に失ってるけど、今や時間の感覚すらあやふやだ。時間が進んでるのか戻ってるのかだって、僕には見当もつかない。

毎日が、ただ、流れていく。

Twitterのタイムラインのように、オートマティックに。

僕が特別な行動を起こさなくても、世界は変わらない。

だったら、僕一人が眠ってしまったても、消えてしまったても。

死のうかな。

そう思うだけで、本当はどうしようもなく生きたいことくらい、僕は気づいてる。

自分勝手と罵られようが、実際、自分勝手なので反論しようもない。甘んじて受け入れよう。僕は、本当に、どうしようもない。どうしようもない、ゴミ屑です。けど、もう少し、生き恥を晒すのを許してください。

どうして、ネットに、匿名の掲示板に、動画のコミュニティに、あるいはTwitterに、僕が今まで依存してきたのか、ふいにわかった気がした。

未練を、残したいんだ。

死なないために、生きるために。

少しでもこの世界に未練を残していき、明日の楽しみを絶やしたくないんだ。

たとえば、顔も知らない誰かの失敗を顔も知らない誰かと一緒に責め立てたり、まだあまり知名度がなくそれでいて完成度の高い動画を独占欲丸出しで視聴したり、僕みたいなどうしようもない人間の精一杯のお道化に反応をもらえることが快感になってきたり。

全て、刹那的で、それでいて、循環的だった。

同じようなことが、日々、繰り返されていく。

その輪っかの中に組み込まれることで、僕は誰かと楽しみを分かち合うことができた。

ネットが優しいわけでも、現実が厳しいわけでもない。

僕は、ただ目を瞑りたかったのだ。思考停止。それにネットが一役買った、それだけだ。

物書きになりたい、その夢だって、どこに出しても恥ずかしくない思考停止手段だろう。

小説を書いてネットで公開すると、少なからず反応がもらえる。他人からの評価が悪かったり、自分自身でも出来に納得できなかったり、僕の場合はそういった不完全燃焼感が次に繋がる。あるいは構想中の長編用プロットを練っていく度に、ふと思いついた面白そうなアイデアをメモする度に、いつか書きたい物語を貯め込んで抱え込んで、僕はどうか未練を残してる。

「本当、どうしようもない……」

思えば、酷い口癖だ。

どうしようか、どうしたいのか、考えるのを避けてるだけ。

どうしようもない人間だ、と自覚があって変わらないわけだから、どうしようもない。

酔いから冷めたみたいに思考停止から冷めると、本当に吐き気がするほど自分がじめじめに感じられ、もつと愚鈍になって右も左もわからなくなりたい、違法合法脱法と枕詞が付くようなお薬に手を出したい誘惑に駆られるけど、臆病者で小心者な偽善者の貧乏人には幸い手が出せない。

パソコンのディスプレイがちらつき始める。

さすがに、目がしばしばしてきた。

かれこれ三十時間くらい起きてるか、活動可能時間はゆうに限界を越えてる。

船を漕ぎ始めそうになりながら、Twitterを更新する。この行為も、もう何度繰り返したかわからない。そこで、僕はデフォルトの鳥アイコンに気がついた。

実に、二週間ぶりのアイミのつぶやきだ。

時間帯はいつもと同じ昼過ぎ……ではなく、深夜だった。

UNOON 【急募】 たすけて。

……え？

なんだよ、それ？ いきなり「たすけて」って、どういうことだよ？ この間つぶやいてたヤツに関係するのか？ そもそも、僕は、アイミを助ける義理があるのか？

人が人を助けるなんておこがましい気がする、いや、けど……。

あのときの「もう、わかったから」というさり気ない、もしかしたら特に意味はないかもしれないつぶやきで、僕はこの世に新しい未練を残せた。どういう経緯か僕はアイミという名前をあげる事になったけど、これでは足りないかもしれない。

そうだ、助けよう。

アイミを鳥かごの中から、出してやろう。

こう見えて、僕は案外義理堅いところがある。何かをしてもらったら、それに報いたいし、恩には恩で返したい。人に傷つけられるのはもちろん嫌だし、だからこそ、人を傷つけてしまう可能性に尻込みしてしまう。

気を遣いすぎ、そう言われることもあった。

自分を変える気概などなく、耳と目を閉じ口をつぐんで孤独に暮らすのも恐ろしく、僕はネットのぬるま湯に漂っていた。傷つけるリスクを隠蔽して、恩に報いをという信念を曖昧にして、僕はこれまでだらだらと生き繋いできた。

だけ。

もう、ここから出よう。

ここから出て、アイミを救い出してやろう。

僕はアイミに勢いのまま返信する。

gm | kuz @UNOON 助ける！ 救い出す！ 手を差し伸べる！ だから、どこだよ！

お前はヒーローか、というツツコミを入れたくなるくらい熱いつぶやきになってしまった。柄じゃない。でも、いいんだ。僕だってヒーローになりたい。退屈な授業中に学校がテロリストの襲撃を受けて教室に立て籠もるという危機的状況を、僕が秘密裏に睡眠学習ないしは漫画などで身につけた殺人術で蹴散らして、あつという間に学校の救世主として一目も二目も置かれる存在になる。こんな妄想を繰り広げてばかりいたくらいだ。

アイミの返信は、一時間後。

通常のツイートではなく、僕宛のダイレクトメールという形でやって来た。

UNOoEN ありがとう、くずつち……。明日の昼頃うちに来て、あたしをここから出して。

そこには他に、住所らしきものが書かれていた。

覚えのない地名だったが、調べてみると僕の家から一時間ほどで行けるようだ。思いの外近い、と言っべきなのかもしれない。少なくとも、新幹線や飛行機が必要な距離ではない。

「行こう…… アイミを助ける」

アイミがどんな人間なのか、僕は知らない。性別も年齢も職業も容姿も、すべてディスプレイの向こう側に、ネットの先にあるもので、僕はうかがうこともできない。香ばしいオジサンかもしれない。ただの悪戯の可能性もある。あるいは謎の組織の陰謀か。指定の場所に行ったら黒服の兄ちゃんに囲まれて臓器を安値で買い叩かれて、拳げ句の果てに東京湾にコンクリと一緒に沈められてしまうかもしれない。

それでも、構わない。

いや、やっぱりそれは困るけど、僕は行こう。

僕にとってアイミがそうであったように、アイミにとって僕も逃げ場所になってやろう。

今日は英気を養うために、このまま寝ることにした。明日は早めに起きてお風呂に入ったり、外出用の服をゴミ箱と自称する僕の部屋から探さないと。

g m | k u z おやすみなさい。明日は幼児なんで、もう寝ます。

完全に誤字だった。

おやすみというレス以上に変態変態とレスされながら、僕は湿った布団に潜り込んだ。

ACT 2 - 1

……むくり。起きた。

明るい、朝か、いや昼なのか。

寝ぼけた頭で考えるに、確かアイミのダイレクトメールには明日の昼頃、つまり今日の昼頃うちに来てということ、ああなんだ今もう僕のうちじゃん、そりやそうだ遅刻するはずないよ、待てようちというのは僕ではなくアイミのうちだよな、そして今は昼過ぎでお天道様があとは沈んでいくだけで、おい、どうすんだよ、寝坊かよ！

逡巡すること、三分間。

布団から飛び起きると同時に、僕はシャワーを浴びた。

考えてみれば、ひと月以上は外出をしてなかった。買い溜めしたカップラーメンや缶詰の類は底を尽き、もうそろそろ外に出なければ餓死をするなという瀬戸際なタイミングでの、アイミの救出依頼だ。

「さあて、服……どこだよ、おい！ 出て来いって、恥ずかしがらないでさ！」

こんなこと言って、恥ずかしいのは僕の方だったけど、気にしては負けた。

よれよれなスウェットじゃない服ってどこに転がっていたっけなとエントロピーが増加して冗談じゃなくゴミ箱のように乱雑な部屋を、ハムスターの生まれ変わりのように掘って探して、なんとかしわくちやのワイシャツとジーパンをサルベージした。

まあ、見られなくはない、だろう。

冷房ガンガンでいつも気にしてないけど、季節は夏。

上着なんか無用だし、上着を探すのにはもう半時間ほど時間を要することを考えると、これがベターな格好だった。体型はお世辞にもたくましいとは言えないけど、太ってない分いくらかマシだろう。

それに合わせて、ややシワがある程度の白いワイシャツにジーパンスタイルだったら、よほど挙動不審じゃなければ、お巡りさんと呼ばれることがないくらいに爽やかな青年に見られるはずだ。

鏡で自分の顔を極力見ないように顎を引きながら上目遣いで髪型をチェックして、僕は一ヶ月ぶりに外の空気を吸った……！

「……………寒ッ！」

季節はどうやら秋らしい。

さようなら、僕の夏休み。

まあ、僕は年中無休で夏休みを仕事にしているようなもんだけど。ぼろアパートの扉を背に、僕はネットとは違うリアルな人の荒波に向かって歩き始めた。

怖い。

人の視線が、重みが、発する熱が、怖い。

勢い勇んで外に出たのに、僕は目的地まで電車で黙って乗ることさえ満足にできなかった。乗った直後はいい。なのに、扉が閉まって容易には出られない状況になってしまうと、急に息苦しくなって暑くないのに汗が噴き出て、うわっ、秋なのに汗だくなんて気持ち悪いな僕、という緊張感で他人の視線を意識するようになって、お手上げだ。

三駅か四駅ごとに、途中下車して呼吸を整える。

帰りたい……。

どうして、こんな苦しい目に合ってるんだっけ……。

僕はポケットからiPhoneを取り出して、クライアントからTwitterを確認する。僕がこんなに苦しい思いをしているにも相変わらず思い思いのつぶやきでTwitterは満たされていた。研究室の飲み会が面倒くさい、どうして頭の悪い上司しかいないんだ職場に、カラオケなう、お昼ご飯はラザニアを作りました、日本の政治の悪いところは、エトセトラ。

なぜだろう、それを見て、とても安心できた。変わらずに一定の

距離を保って、僕が知ってる僕を知ってる存在が確かにある、それが心強かったのだ。

アイミのアカウントも確認したが、あれきりつぶやいてない。たすけて、という言葉が、今にも聞こえてきそうだった。

待ってる、我慢しろ、僕が駆けつけてやる！　僕の方から駆けつけてやる！

恥ずかしい妄想癖のある中学生みたいな熱意が、今の僕の胸には宿っていた。

僕に生きようとする未練をくれたアイミを、助けたいんだ、手を差し伸べたいんだ。

あいにく、僕は勇者ではないけれど。町の周辺のザコ敵どころか、こうやって外に出て電車に乗ることでダメージを受けるステータス異常『引きこもり』の二十歳児だけれど。僕だって、僕だって……変わりたいんだ。もしこんなどうしようもないゴミ屑が、誰かのためにできることがあるとわかったら、誰かを助けたりできるのなら、僕はどうしようもないから卒業して、どうにかしなきゃと思えるようになるかもしれないんだ。

ダイレクトメールに送られた住所を魔法の言葉のように口の中でつぶやきながら、僕が目的の駅に着いたのは日が沈みかけた頃だった。

ヤツ、というのにできるだけ鉢合わせたくない。

僕は送られた住所をGoogleマップに入力して、歩き慣れぬ町を職質される一步手前な挙動不審さでうろついた。

下校途中の学生が僕を見て笑ってるような気がした。買い物帰りのおばさんが僕の噂をしてるような気がした。散歩中の犬ですら僕を馬鹿にしたような目で見てる気がした。

気がした、気がした、全部、僕の気のせいかもしれないのに、気分が滅入る。

逃げたくなる、閉じ籠りたくなる、死にたくなる。ぐっと、腰に力を入れてその衝動を堪えた。

逃げるのではなく、助けるためにここまで来たんだ。閉じ籠ってばかりじゃ駄目だと、外に出たんだ。死にたいんじゃない、本当はどうしようもなく生きたいんだ。

久しぶりの遠出で、叫んで膝を抱えてうずくまりたくなるほど疲弊しながら、僕はやっとそれらしきアパートを見つけた。

部屋番号は二一、錆び付いたブランコを漕ぐような音を立てる階段を上ったすぐ先に、目当ての部屋はあった。

扉の前で、しばし逡巡する。

呼び鈴を鳴らすか否か。

あまり悩んでいたら、ご近所さんに挙動不審を目撃されてしまう。無礼と危険を承知で、僕はドアノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開けた。

鍵は、かかってない。

中の様子を窺ってから入りたかったけど、家の前でうろろしてるのも良くないと判断。さっと、滑り込ませるように僕は中に入り込んだ。

他人のプライベートなテリトリーに入るのは、お情けで誘われた小学校のお誕生日会以来だった。他人の家の、匂いがした。なぜだか、居心地が悪くなる。ここはお前の来るべき場所じゃない、帰れ帰れ、と輪唱されてる気分になったけど、意識的に頭を横に振り、くだらない被害妄想を振り払う。

ここが、アイミのうちのだろうか。

玄関の脇に台所があるタイプの小さいアパートだ。きちんと整理が行き届いていて清潔感があった。正面、和室と思わしき一部屋は、襖が閉まっていたので様子がわからない。靴を脱いで、恐る恐る中へ入った。

襖に手をかける。

心臓が口から出てしまふんじゃないか、本気で心配になるくらい動悸が激しい。

この先に、アイミが？

それとも、もうヤツが帰ってしまったか？

どのみちここまで来たら不法侵入だ、アイミだろうとヤツだろうと、僕が相手になってやる、ニートなめんなニート、どうせ失うものなんてないしな、と開き直って僕は自分を奮い立たせた。

なるべく音を立てないように、襖を横にずらす。

部屋には……誰もいなかった。

物が少なく生活感を感じさせない和室の真ん中、ちゃぶ台に置かれたノートパソコンが開かれっぱなしになってるのが印象的だった。誰も、いない？

もしかして、アイミは僕の想像上の存在だったりしたのか？

あるいは、あの忌まわしき『b o t美人局事件（勝手に命名）』の再来か？

そう思ってた矢先。

「……………れ？ ……誰？」

と、か細い声が聞こえてきた。

幻聴じゃなければ、押し入れの中から声がする。

ん？ 押し入れの中だって？ どうして？ どうして、自分のう

ちなのに隠れなければならなんだ？

不審に思いながらも、意を決して、僕は押し入れを開けた。

そこには。

「……だ、れ？ もしか、して……」

押し入れにうずくまるようにして、女の子が身体を震わせて丸まっていた。

黒目がちの大きな瞳を潤ませながら、肉食動物に捕食されるのを悟り運命を受け入れた草食動物のような弱々しさで、女の子が体育座りしながら僕を上目遣いで見上げた。

思わず、僕は目を疑った。

女の子があまりにも可愛いから目を疑ったのなら、良かった。いや、それも正しい。もし、その異様な光景が広がってなかったら、目の前の女の子は我が目を疑うほどの美少女と形容するだけの容姿

だった。

中学生ぐらいの年頃だろう。黒髪のボブカットは艶やかで、顔立ちや体格などはまだ女性として熟してないながらも、それがかえって中性的で美しいと素直に感じた。

だが、目を疑ったのは、女の子の整った容姿じゃない。

まずは、服装。

女の子が身につけていたのは、アパートの和室には不釣り合いなほどフリルのたくさんついた黒いドレスだった。好きで着てるというより、着せられてるという印象を受けたのは、どうしてだろう。まるで、お人形やペットの犬に服を着させて喜んでるような悪趣味な感じを受けた。

目を疑いたくなる、あるいは覆いたくなる要素は、まだあった。ドレスから露出した肌には、鞭で打ったような腫れがあったのだ。ほとんど陽を浴びてないような白い肌に、呪われたミミズが纏わり付いたような赤い腫れが幾筋も走っていた。

虐待。

ふいに頭に浮かんだ言葉が、妙にしつくりと、気持ち悪いくらいしつくりと来たことに怖気がした。目の前の女の子は、一体今までどんな扱いを受けてきたのだろう。そんなの、想像できない、したくない。

「君が……アイミ、なの？」

びくり、と身体を大きく震わせてから、とても申し訳なさそうに、とても切なさうに、女の子は頷いた。

僕は今すぐにも彼女を連れてここから逃げ出したくなった。生まれて初めて、僕は大声を上げたくなった。泣きそうで、だけれど怯えて泣けないでいる彼女に代わって、僕が泣いて助けを求めたかった。こんなところにはいけない、きつと、大事な何かが大きく狂ってる。

だけど、彼女一人を連れ出すことすら叶いそうにない。

女の子の、アイミの首には、鎖に繋がれた首輪がはめられていた

から。

首輪、かよ、人間なのに、こんなやつて……。

僕はしばらく、呆と立ち尽くしてしまった。

だから、アイミが目を見開いて僕の後ろに視線を向けてることに気づくのが遅れてしまった。

後頭部に鈍い衝撃を受けたと同時に、僕の視界はブラックアウトした。

「……な！……い、……きろ！ほら、起きろって！」

誰かが、僕の頬を叩いて起こしてくれてる。

隣に住んでるちんちくりんな幼なじみなんていないから、借金の取り立て人か誰かだろうか。でも僕は別に借金もしてないよなあ、不思議だなあ、頭が、主に後頭部が痛いなあ、不思議だなあ、そして目の前には見知らぬ男が立ってるなあ、てか誰？

身体を動かそうとして、違和感。

声を上げようとして、また違和感。

僕は、ようやく自分の置かれてる状況がわかってきた。

「ようやく、目が覚めたみたいだね、そのまま死んでくれても良かったけど、どうせ死ぬにしても余興くらいにはなってもらわないとね、俺だって楽しみたいんだよ、今日は特別な日だからさ、ああ、興奮してくるよな、どうだい、君も祝ってくれるだろう？」

僕の頬を叩いていた神経質そうな眼鏡の男が、穏やかな表情を浮かべながら意味不明なことを口走っていたけど、今はそれどころではない。

僕は手足をしっかりと布のようなもので縛られ、口にもハンカチ何かを押し込められガムテープで留められた状態で、襖を背にして座っていた。

身動きがとれず声も上げられず、アイミのうちで無様にも捕まっていたんだ。アイミを助けるつもりで来たのに、ヤツによって僕も囚われてしまった。そうだ、アイミは？

アイミは、和室には不釣り合いな黒いドレスを着たまま、部屋の隅っこで精気のない瞳でこちらを見ていた。何もかも諦めきってしまって、疲れてしまって、僕ですら思わず痛々しくなってしまうほど、絶望し憔悴しきった顔をしていた。

Twitterでのとぼけた、だけれど明るい印象など見る影も

ない。

ふつふつと、怒りが湧いてきた。

「今日はさ、ポチの十五歳の誕生日なんだよ」

ポ、チ……？

嫌な、予感がした。

「ああ、君は知らないかもしれないけど、アレは俺の实の娘でさ、名前はまだないんだよ、アレの母親と離婚調停してときに生まれた子で親権だなんだガタガタしてたからさ、あの馬鹿女ぶん殴って黙らして俺が引き取ることになったんだけどね、そうそう、出生届？　っていうの、出し忘れちゃって、名前はまだない、猫みたいだね、呼びやすいからポチって呼んでるから、名前は犬みたいだけだよ、ハハハハッ！」

ああ、今の僕の気持ちを形容する言葉がほしい。

地球上のありとあらゆる口汚い言葉を集めてブレンドしても、きつとこいつには言い足りない。言葉のもつ潜在的な暴力性をこころで感じたのは、初めてだった。学生時代に虐められてた経験なんて振り返れば大したことなかった。狂ってるとか狂ってないとか、そんな表現が生易しく思えるほど、身体を曲げて大笑いしてる目の前の男はズレていた。

怒りも度が過ぎると、冷えてくることを知った。

冷えて、冷え切って、今なら冗談抜きでこの男を無表情で殺せてしまつかもしれない、と……。

駄目だ、落ち着こう。

まずは、この状況を打破する手立てを考えなければいけない。

力もないし、頭も良くないし、働いてもなければ夢もあやふやな僕が、いったい何ができるのか、わからない。だが、一刻も早くアイミをここから連れ出したかった。連れ出さなければならぬ、と強く感じた。

「君はあれだろ、ネットの世界からやってきた正義の味方といったところだろ、最近流行りの、なんだっけな、ついたーだっけ、や

つてゐることは知つてたけど、助けなんか呼んだらどうなるか、ポチも学習したかと思つたら考えが甘かつたか、もつと厳しく『駄』をしないといけないみたいだな」

駄。

その言葉を聞いて、アイミはひときわ、身体を震わせ始めた。

「……さい。……めんなさい。……ごめんなさいごめんなさい」

「まあいい『駄』は明日以降にして、今日はポチの誕生日を祝つてあげなきゃいけないんだつたな、約束通り、というか俺が勝手に決めたことだつただけで、ポチも晴れて十五歳になつたからさ、ポチを『女』にするのも俺の仕事だと思ふんだよね、今までみたいな『駄』じゃない、しっかりと俺がポチを『女』に、立派な『女』にしてやろうという親心を、君みたいな若い子にはわからないだらうなあ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「大丈夫だよポチ、ほーら、こんなに俺は優しいから」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

眼鏡の男は壊れた人形のように謝り続けるアイミの頭を、気味が悪くなるほど優しい手つきで撫でていた。男の足下で虚ろな目をして「ごめんなさい」とつぶやき続けるアイミ。それをなすすべなく見てゐるだけの僕。

サーカスの象のごとく、アイミはきつと反抗しないように『駄』られたのだらう。

繰り返される「ごめんなさい」を聞きながら、僕は傍観者でしかなかった。

このままアイミが『女』にされるのを、黙つて見てなきゃいけないのか？ 冗談じゃない！ そんな馬鹿なこと許されるか！ 実の父親が娘を犬扱いして首輪して『駄』と称して虐待して挙げ句の果てに『女』にするだと！

めらめらと、怒りが湧いてきた。

怒りに沸点があつたら、既に部屋を怒りの蒸気でいっぱいにできただろう。僕は眼鏡の男、アイミの父親をありつたけの憎悪を込めてにらめつけた。何もできない自分が腹立たしく、縛られた手足をばたつかせた。口に含められたハンカチを吐き出す勢いで、腹の中から声を振り絞った。

「うーーーーーッ！」

「どうしたんだい急に、君が思ってる以上に君は無力なんだ、黙って見てな、よつと！」

サッカーボールのように、眼鏡の男が僕の腹を思いきり蹴り上げた。

胃液が溢れ口の中がいっぱいになったが、吐こうにも吐けない。

酸っぱさと一緒に圧倒的に気づかされた、僕は世界の主人公じゃないということに。

妄想のなかだったら、僕はテロリストを片手であしらう謎の転校生だったり、失われた禁呪を使いこなす大魔法使いだったり、常人を圧倒するセンスを秘めた流浪の剣士だったり、もうなんでもござれなのに。

現実の僕はどうか。こんな状況になっても、アニメや漫画の主人公のように急に強くなったりしない。無力で無職で取り柄も職歴もない、ただの引きこもりのニートだ。きっと、このままだと最悪の結末をこの目で見届けることになる。

視界が歪む。

悔しさと情けなさで涙が溢れてきた。

ああ、どうしようもないほど、本当に、僕は無力だ。

眼鏡の男は、腕を組んだまま僕を見下ろして、急に満足げな表情を浮かべた。

「ああ、これはいいね、もしかして君はついたーとやらでポチに惹かれたのか、そうか愛だね愛、それは本当にいいよ、だったら尚更、君には是非ともポチが『女』になる一部始終をしっかりと見届けてもらいたい、俺さ芥川龍之介の『藪の中』好きなんだよ、知っ

てる『藪の中』?」

知ってたけど頷くのも癪だったので、僕は陸に打ち上げられた魚のように暴れ続けた。『藪の中』の真相はタイトル通り藪の中な感じで曖昧になってたけど、縛られて見ているだけだった男が死ぬということとは揺るぎなかった。

僕は、殺されるのだろうか?

それとも、無念のあまり自殺してしまうのだろうか?

ちよつとまえまでは「死のうかな」が口癖ならぬ考え癖だったのに、今はどうしても死にきれない。視界の隅で心配そうな目で僕を見つめるアイミ。彼女を助けるために、僕はここまで来たんだ。男なら、誰にだってヒーローになりたい願望がある。僕だって、どうしようもない僕だって、目の前で理不尽な目にあってる女の子がいたら助けたいんだ、手を差し伸べて連れ出してあげたいんだ、どうにかしなきゃと腹の底から本気で思うんだ。

勝算なんてまったくない。

ただ、僕はアイミを助けたい一心で芋虫のように這いつくばりながら眼鏡の男に向かっていった。足を縛られ、両手も後ろに固められてる状態なので、無様でもみつともなくても畳を這っていくしかない。

「ハハハハッ! なんだいそれは、もしかしてそうやって悪あがきしたらポチを助けられるとも思ってるのかい、本当に君は楽しいねッ!」

容赦なく、蹴られる。

暴力、暴力、また暴力。

肩が外れたかもしれない、痛い、口の中は血まみれだ、痛い、目蓋が切れて視界も塞がる、痛い、ああ痛いなあこのやろう! どうして僕はアニメや漫画の主人公のようにいけないんだ!

「や、やめ……」

「ん、なんか言ったかなポチ、まあ気のせいだと思うけど、俺のやることに口答えなんかしたら『躰』の時間が倍になるよ、ああそうか、早く『女』になりたいからこんなゴミ屑と遊ぶのやめてほしいってことか、まったく十五歳になったら急にこれだもんな、俺も久しぶりに頑張る必要があるかな、ハハハハッ！」

「い……い、や……」

アイミは懸命に抵抗しようとしてるけど、声にならない様子だった。

いったいヤツにどんな『躰』をされたら、あんなにまで脅えることができるんだ。もしこれでアイミがヤツに『女』にされてしまうことを許したら、完膚無きまでに取り返しがつかなくなってしまうんじゃないか。

今の僕の痛みなんか、アイミが受けてきた痛みの十分の一にも満たないだろう。

実の父親にポチと呼ばれて、恐らく学校すら行かせてもらえず、唯一許された平日の昼間にネットの世界に逃避し、偶然Twitterで僕を見つけて、『躰』が厳しくなるリスクを冒しながらも僕に助けを求めたアイミ。

運命なんて、くだらない言葉かもしれない。

けれど、偶然と切り捨ててには惜しい。

僕はアイミに「もう、わかったから」という言葉をもらい、お返しに「アイミ」という名前をあげた。僕にとってその言葉が逃げ場所だったように、アイミにとっても名前は逃げ場所だったんだ。

僕たちは出会ってよくして出会った、そんな陳腐な言葉さえ浮かんでくる。

引きこもっていた僕と、理不尽な境遇から外に出たかったアイミ、

僕たち二人が一緒になれば、ちょうどいいじゃないか。ああそうさ、二人一緒に変わってやろう。

飛べないなら、歩いてやる。

急に強くなれないなら、少しずつ強くなってやる。

一人じゃ外に出ることもできないなら、二人で寄りかかって外に出てやる。

「うーん、もう抵抗しないのかな、まあいいか、やっぱり君はその程度の屑なんだ、気絶されちゃ観客にはならないし、ほら、ちゃんと座って、ポチが『女』になるとこを見届けてくれよ、ポチだってその方がきつと喜ぶからさ、なあポチ」

「……や」

僕を襖に立てかけるように座らせると、男は背を向けてアイミに近づいていった。

今しかない。

激しくもがいたせい、そもそも縛りが甘かったせい。

足を縛っていた布がゆるんで、ある程度の自由がきくようになっていた。

僕は両足で踏ん張るように立ち上がり、決死の思いで油断しきつた男の背中に飛び込むように体当たりした。

不意を突くことができたのだろう。

男はうつ伏せに倒れて、動かなくなった。

よし。

手応えは、ある。

あつたが、次に打つ手がない。

僕は未だに両手の自由を奪われてる状況だし、力だつて自慢できるものではない。

男の方も腕自慢には見えなかったけど、今の状況で真正面からぶつかってどうにかなると思えなかった。

アイミも口を開け、驚いたように倒れた男を見る。

充分痛い目にあつたんだ、僕はともかく、きつとアイミは……な

らさ神様、このままハッピーエンドでいいだろ？　ちょっとくらい慈悲を見せてくれてもいいだろ？

どうか、立ち上がるな！

どうか、立ち上がらないでください！

時間が止まったかのような静寂が続いた。

一秒、一秒が、ヘドロの海を沈むかのように重く流れる。

まだ、男は動かない。

アイミも恐る恐る立ち上がり、一步、二歩と、僕に近づいてくる。無様だけど、不意打ちというみつともない戦い方だけど、これで終わったんだ。

そう思い、僕は腫れて視界が悪くなった目で改めて男を見た。

「……………痛い、なあ」

くそつたれな神様は、バッドエンドがお好みようだ。

男は、むくり、とゾンビのように立ち上がり、僕を睨みつけながら前進してくる。

「ああ、まったく、俺は男を『躰』する趣味なんてもってないからさ、もうさ、君、いらないよ、ポチが『女』になるところを見てもらおうと思ったけど、やめだやめ、残念だけど、君は選択肢を間違えたんだ」

男は屈み込んで、僕の顎に指をかけ強引に上向かせた。

「君みたいなゴミ屑は、人の役になんか立てないし、誰も救えないんだよ、ポチは俺の物だし、ポチは俺にとつて必要なペットなんだ、ポチの母親のように金銭感覚がズレてるギャンブル狂の馬鹿女とも違うし、無能なくせに態度だけはかい会社の禿げた馬鹿野郎とも違う、ポチはね、俺の、娘なんだよ、どんなときも従順に、『躰』をすれば足でも黙って舐めてくれる、俺のことを絶対に裏切らない、ポチはね、ポチはね…………ツ！」

男は、泣いていた。

泣きながら、僕を殴り続けた。

まるで、子どもが駄々をこねるかのように。

大切なオモチャを取られまいと、声を荒げて抵抗してるようだった。

一撃ごとに力は弱まってくけど、抵抗できない僕はただただ拳を喰らうしかない。

誰だって、言い分がある。

誰だって、孤独なのかもしれない。

だからといって、アイミから自由を奪う目の前の男を僕は許せない。

知り合ったきっかけはTwitterだったし、ろくにアイミの過去を知ってるわけでも、面と向かって会話をしたわけでもないのに、人の家庭に首を突っ込むのはおこがましいとか、そんな面倒くさいことはくそつたれな神様ごと斬って捨ててやる。

僕は、アイミを助けたい。

僕なんかを頼りにしてくれたアイミを、どうにかして救ってやりたい。

だから、アイミも、助かりたいと本気で思っていてくれ。

殴られたときに引っかけたのだろう、僕の口を塞いでいたテープは剥がれかけていた。

僕はここぞとばかりに腹に力を入れ、吐き出す。

口の中に入れられていたハンカチを男の顔に吐き飛ばすと、僕は腹の底から声を出した。

「アイミ！ こいつが何て言っても、アイミはアイミだ！ 名付け親で童貞二ートのキモオタ野郎が、アイミをここから救いだしてやるから、アイミも、もう、ポチなんてやめてここから出よう！」

口の中が切れていて、鉄の味がいっぱい、ろくに伝わらなかったかもしれない。

僕がアイミを救おうと思っても、ただの独りよがりなんだ。

Twitterで「たすけて」とつぶやいたように、現実でもアイミが助けを求めないと。

アイミは名前を呼ばれる度に、電撃が走ったかのように身体を震

わせていた。

「はあ、君、アイミって、誰だよ」

「アイミッ！」

「もしかして、ポチのこと言ってるのか、ポチはな、ポチなんだよ、アイミなんていう勝手な名前付けるんじゃないやねえよ、ああ、わかってんのか、この屑が、ポチもそんな気障だったらしい名前なんか嫌だよな、なあ、ポチ」

僕を殴る手を止め、男が緩慢な動作で振り返る。

「あ……あた、しは……」

そこには。

お人形のように黒いドレスを着せられ。

露出した肌に呪われたミミズのような腫れが浮かび。

実の父親にポチと呼ばれて虐待を受けていた女の子が。

その両手にノートパソコンを高らかに掲げて立っていた。

「あたしは……」

「え、ポチどうし、て」

「あたしはッ！ アイミだああああッ！」

アイミは、叫んだ。

あのおどおどしたポチの面影は、もうそこにはなかった。

よほどアイミが自分に齒向かわないと思ってたのだろう。

男は呆氣にとられた様子で、振り下ろされるノートパソコンの一撃を直に受けた。

今度こそ、男が立ち上がることはなかった。

EPILOGUE

「はあ、はあ、なんだか逃亡者みたい、だね」

「……う、ん」

肩で息をしながら、僕たちはなるべく人通りの少なそうな路地に入って立ち止まった。

僕の格好も、アイミの格好も、目立ちすぎる。

ボロボロで血だらけな男が、生々しい傷跡のある可愛いゴスロリ女の子の手を引っ張って町中を歩いてるのだ。間違いなく、誰かに見つかったら僕は変質者として手が後ろに回ってしまうだろう。

幸い、アイミのうちからここまで、買い物帰りのおばあさんくらいしかすれ違わなかった。心配そうにこちらを見ていたおばあさんには、「いやあ、飼ってる猫にやられたんですよ、ははは」と笑顔で言うておいたから、問題ない。はずだ。

ヤツは、アイミの父親は、まだ倒れたままだろうか。

頭を強打され男は気を失ってはいたものの、命に別状はなさそうだった。

何かあっても後味が悪いので一応119番に電話をしたけど、そこから問題だ。

まず、僕はボロボロだった。

むしろ救急車が必要なのはヤツよりも僕かもしれない、という状態だったけど、いろいろと聞かれるのが面倒だったし、うまく説明することもできそうになかった。

Twitterで知り合った女の子に助けを求められて、引きこもりの身体をどうにかこうにか引っ張っていったら、実はその子は変態な父親に軟禁され虐待されてまして、こりゃいかんと思って手足を縛られながらも体当たりをかまして、まあ、結局は彼女自身の手で決着をつけたんですけどね。

なんてことを、僕みたいな引きこもりがすらすらと警察の方に説

明できるはずがない。

アイミは未成年なので事情を説明すればしかるべきところに保護されるかもしれないけど、未成年だからこそ保護者の元に戻されるかもしれない。

一応そういう選択肢もあると話したけど、アイミは黙って僕の服を掴んで離さなかった。

正直、きゅんときた。

守らなければならない、そんな大層なことを強烈に感じた。

ポチではなく、アイミであることを選んだ彼女を、僕は守っていききたい。

男のポケットから首輪の鍵を奪って、僕はアイミの手を引っ張ってあの鳥かごから出た。

アイミは人見知りをするのか、そもそもヤツ以外とほとんど関わって生きてなかったからなのか、借りてきた猫どころではないほど大人しかった。

何か強引にでもこの場を和ますことを言わないと、という見当外れな使命感に駆られ、僕は安易にも下ネタに走るといふ暴挙に出た。「とりあえずさ、うちに帰ったら、一緒にお風呂に入ろう、うん、それがいい。僕もボロボロだし、アイミだって汗かいたろ。そうか、どうせなら、洗いつこしようか、洗いつこ」

僕はわざとらしく手をわきわきといやらしく動かしながら言った。もちろん、冗談だ。冗談、だけど……改めて見るとアイミは確かに可愛い。それに、今日でちょうど十五歳、めっちゃストライクゾーン。い、いやいや、それじゃあロリコンじゃないか。

引きこもりのニートから、ロリコンのニートにクラスチェンジした！

全然駄目じゃん、なんか似たような展開見たことあるし！

あ、そういえば、今さり気なくうちに帰ったらなんて言っただけ、これからアイミがどこに住むか問題だ。

正直、他にも問題なんて山積みだ。

出生届を提出してないというアイミの今後はどうするんだ、僕だつてただのニートだしどうにかお金を稼がなければ、親権は確か十五歳から選択できたはずだからアイミの母親を見つけれたら何か進展があるかもしれない、そして何よりヤツに刻まれた虐待という重みがアイミにのしかかってくるだろう。

どうしようもない、なんて、もう言わない。

どうにかしなきゃ、いけないんだ、僕はもう。

「帰る……って？」

消え入りそうな声で、アイミはつぶやいた。

僕は深呼吸してから、背中を向けたままのアイミに語り出す。

「二人で寄り添って生活するくらい、なんとかするよ。今はニートだけど、働き口も見つける。アイミの今後も、ちゃんと考える。両親が役所勤めだから、もしかしたらいい知恵をくれるかもしれない。一人じゃどうしようもなかったけど、アイミとなら、どうにかしなきゃと思えるんだ。だから……帰ったら一緒に風呂に入ろう」

そうさ、問題があっても、僕はアイミのためなら頑張れる。人のために自分ができるなんて今まで考えられなかったけど、これからは……。あと、ギャグの基本は天井だと偉い人も言ってた。

「くずつち……」

少し前を歩いていたアイミが、くるりと僕の方に振り返った。

てつきり呆れたり怒ったりしてるかと思ったけど、そこには初めて見るアイミの笑顔があった。口角をにやりと上げて、ちよつと生意気そうな、僕がTwitterでのやり取りで想像していたような、ドキリとする少女らしい微笑みだ。唯一想像とは違ったのは、その目に、涙がこぼれんばかりたまってたこと。

このとき、僕は恋をした。

僕は、アイミと初めてしっかりと向き合って、改めて生きるための未練を植え付けられた。死のうかな、なんて、嘘でも言えない。僕はアイミと一緒に、生きたいんだ。アイミと一緒に、お風呂に入りたいんだ。いや……うん、それも本心か。

アイミは泣き笑いの表情で、僕たちの第二の出逢いを華麗に演出した。

「くずうち……猫のうんこ踏んで死ね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9180s/>

【急募】あたしの名前！

2011年5月2日02時25分発行